

《イスラーム諸王朝の興亡》

次のA～Cの文章中のa～h に最も適する語句を記し、下線部に関する問に答えよ。
(25 点)

- A 13世紀から①中央アジアの大部分を支配したチャガタイ=ハン国が、14世紀前半に東西に分裂したのち、西チャガタイ=ハン国の混乱に乗じて勢力を広げたティムールは、1370年、東西トルキスタンを統一してティムール朝を樹立した。彼は現在のアフガニスタン・イラン・イラクなどに当たる地域を支配下に収め、北インドの②デリーをも一時占領した。ティムールは、首都 a に領内の各地から職人・学者を集め、モスク・廟など多くの建築物を建てさせたが、明への遠征に向かう途上、シル河畔のオトラルで病死した。その子孫は以後約100年にわたって帝国を維持し、宮廷を中心に高い水準の文化を生み出したが、16世紀初頭、トルコ系の b 族によって滅亡に追い込まれた。

問1 下線部①について、「中央アジア」に関する説明として誤っているものを次の中から1つ選び、記号を記せ。(3点)

- ア 中央アジアのオアシスでは、古くからイラン系のソグド人が通商に活躍した。
イ 突厥がモンゴル高原から中央アジアにかけての地域に築いた大帝国は、840年、ウイグルの攻撃を受けて崩壊した。
ウ 10世紀末以降、カラ=ハン朝の下で中央アジアのイスラーム化が進展した。
エ 中央アジアからイランにかけての広い地域を支配したホラズム朝（ホラズム=シャー朝）は、チンギス=ハンの攻撃を受けて崩壊した。

問2 下線部②について、当時「デリー」を支配しており、ティムールの攻撃によって衰退したデリー=スルタン朝の王朝は何か。(2点)

- B 1501年にイランに成立したサファヴィー朝は、シーア派の穏健な一派である c 派を国教とし、③イランの伝統的な君主の称号を採用した。サファヴィー朝の最盛期を現出したのは第5代君主のアッバース1世である。彼は、新軍の創設や行政改革を行って集権化に成功し、イスファハーンへの遷都を行ってメイダーン（広場）を中心にモスク・マドラサ（学院）・バザールなどを築き、ヨーロッパ諸国との貿易を振興した。また彼は、商業・軍事の要衝であったペルシア湾口の d 島を、1622年にポルトガル勢力から奪回した。

問3 下線部③について、この「イランの伝統的な君主の称号」は何か。カタカナで記せ。
(2点)

C インドにイスラーム勢力が最初に侵入したのは、ウマイヤ朝時代の8世紀初めのことである。その後、10世紀後半にアフガニスタンに成立した 朝、次いでこれを倒したゴール朝が西北インドにしばしば侵入したことで、イスラーム勢力のインド侵入は本格化し、13世紀以降には北インドに5つのイスラーム王朝が興亡した。アイバクによって樹立された に始まるこの5王朝は、デリー=スルタン朝と総称され、その支配の下でインドのイスラーム化が次第に進んだ。

その後、1526年にバーブルがデリー北方における の戦いでデリー=スルタン朝最後のロディー朝を破り、ムガル帝国を建てた。ムガル帝国期には④インドの伝統的な文化とイスラーム文化の融合が進み、インド=イスラーム文化が全盛期を迎えた。宮廷では、ムガル絵画と呼ばれる写実的な絵画が栄えた。また、第5代皇帝シャー=ジャハーンの名により建てられた は、インド=イスラーム建築の最高傑作として有名である。

問4 下線部④について、ナーナクがイスラーム教とインドの伝統的な宗教であるヒンドゥー教を融合させて創始した宗教は何か。(2点)

ポイント

イスラーム諸王朝の興亡について出題した。ティムール朝・サファヴィー朝・ムガル帝国を中心として、中央アジア・イラン・インドを支配した民族や王朝・国家の変遷を理解し、地域間のつながりについても整理してほしい。上記の3王朝については、主要な君主とその事績、地名なども入試では頻出なのできちんと押さえておこう。

解答

a サマルカンド b ウズベク 問1 イ 問2 トウグルク朝
c 十二イマーム d ホルムズ 問3 シャー
e ガズナ f 奴隷王朝 g パーニーパット h タージ=マハル 問4 シク教

解法

空欄や下線部を伴うリード文が提示された場合、時間に余裕がある時は、まずリード文をざっと眺めて大問全体のテーマを把握し、その上で各設問に取り組むとよいだろう。空欄の前後の文や、設問文の内容をよく確認して解答するように注意しよう。

b・問1 中央アジアで興亡した民族・王朝・国家は紛らわしく苦手としている受験生も多いが、**民族系統、活躍した時代や地域、周辺の諸民族・諸国家との関係など**、その民族の特色となるポイントに着目すると問題が解きやすくなるだろう。

- c サファヴィー朝が、シーア派のなかでもどの一派を国教としていたかが問われている。空欄の前の文章を精読せずに「シーア」などと答えないように注意しよう。シーア派の諸派と、これを信奉した主なイスラーム王朝は次の通りである。思想の特徴とともに整理しておこう。

	特徴	主な王朝
イスマーイール派	過激派。8世紀頃にイスマーイールにイマーム（シーア派における最高指導者）の継承権があると主張して分派。スンナ派と激しく対立した。	ファーティマ朝
十二イマーム派	穏健派。シーア派内の主要派で、アリーとその直系の12人のイマームを真のイマームと見なす。	ブワイフ朝 サファヴィー朝

解 説

- a 西チャガタイ=ハン国の武将であったティムールは、1370年にティムール朝を建国し（位～1405）、中央アジアのオアシス都市である**サマルカンド**に都を置いた。ティムール朝の歴代の君主は学芸の振興をはかって文化人を保護し、サマルカンドではイラン=イスラーム文化の影響を受けたトルコ=イスラーム文化が栄えた。

- b トルコ系民族の**ウズベク族**（遊牧ウズベク）は、15世紀中頃から中央アジアで勢力を伸ばし、16世紀初頭にはティムール朝を滅ぼした。ウズベク族は、これと前後して**ブハラ=ハン国**と**ヒヴァ=ハン国**を建てたほか、18世紀には**コーカンド=ハン国**を建国し、内陸の隊商貿易で繁栄した。

問1 突厥は、6世紀中頃にモンゴル高原で台頭し、同世紀後半には東西に分裂した。西突厥は8世紀初めに内紛で崩壊し、東突厥は8世紀中頃にウイグルに滅ぼされた。**ウイグル**は突厥に代わってモンゴル高原を支配し、中央アジア方面にも勢力を伸ばして大帝国を築いたが、内紛によって衰退し、840年に**キルギス**の攻撃を受けて崩壊した。その後、ウイグルは四散して、その多くが中央アジアに移住し、この地域がトルコ化するきっかけを作った。

問2 ティムールは1398年に北インドに侵入し、デリーを占領した。当時この地にはデリー=スルタン朝の3番目の王朝である**トゥグルク朝**（1320～1414）が存在していたが、ティムールの侵入により混乱状態となり、1414年にサイイド朝（～1451）がこれに代わった。

- c サファヴィー朝は、シーア派の**穏健派**である**十二イマーム派**を国教とした。十二イマーム派は、第4代正統カリフのアリー（位656～61）とその直系の子孫の合わせて12名のみをイマーム（指導者）と認める一派である。

- d ペルシア湾岸の要衝であった**ホルムズ島**は、1515年に**ポルトガル**に占領されていた。アッバース1世（位1587～1629）は1622年にポルトガルの勢力を破ってこれを奪回した。

ここもチェック

サマルカンドは、前4世紀頃から**東西貿易の拠点**として発達した。

ここもチェック

アッバース1世が遷都したイスファハーンの繁栄ぶりは“**イスファハーンは世界の半分**”と称されるほどであった。

問3 サファヴィー朝は君主の称号として**シャー**を採用した。シャーは“王”を意味するペルシア語で、アケメネス朝の時代から用いられていた。

e 10世紀半ば、サーマーン朝のmamuluk出身のアルプテギンはアフガニスタンに**ガズナ朝**を建国した。ガズナ朝はインドへの侵入を繰り返し、イラン方面にも領土を広げたが、12世紀中頃に成立したゴール朝の台頭によって衰退し、1187年に滅亡した。

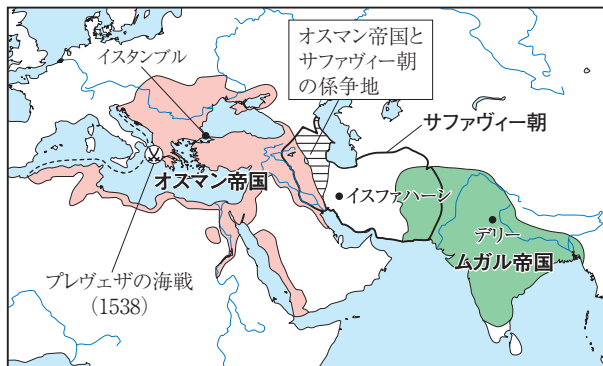
f ゴール朝の武将であった**アイバク**（位1206～10）は、1206年、北インドのデリーで自立し、デリー＝スルタン朝最初の王朝である**奴隸王朝**を建国した。

g ティムールの子孫のバーブル（位1526～30）は、ウズベク族に敗北すると、インドへの進出をはかり、1526年にはデリー北方のパーニーパットで**ロディー朝**を破り（**パーニーパットの戦い**）、デリーを占領してムガル帝国を建国した。

h ムガル帝国の第5代皇帝であった**シャー＝ジャハーン**（位1628～58）は、アグラの郊外に、愛妃の墓廟として**タージ＝マハル**を建てた。

問4 インドの宗教指導者ナーナクはヒンドゥー教とイスラーム教を融合し、16世紀初めに**シク教**を創始した。これはイスラーム教の影響を強く受けた一神教的な宗教で、偶像崇拜やカースト制に反対し、苦行を禁止した。シク教徒はパンジャブ地方で勢力を拡大し、1799年にはシク王国を建国した。

▼ 16世紀の中央・西アジアのイスラーム国家（最大領域）



✔ここもチェック

シク王国は、19世紀中頃にイギリスとの戦争に敗北し（シク戦争：1845～46, 48～49）、パンジャブ地方はイギリス領となった。